

令和六年度入学試験問題（前期日程）

国語

教育学部 学校教育教員養成課程

小学校教育コース 教科教育専攻 を受験する者は、☐一、☐二について解答しなさい。

中学校教育コース 教科教育専攻 国語教育専修 を受験する者は、☐一、☐二、☐三、☐四について解答しなさい。

注意事項

一、解答時間は、小学校教育コース 教科教育専攻 を受験する者については八〇分、中学校教育コース 教科教育専攻 国語教育専修 を受験する者については一〇〇分である。

二、解答は必ず解答用紙に記入すること。

三、受験番号を解答用紙の所定の欄に記入すること。

四、解答は縦書き、鉛筆（シャープペンシルを含む）書きにすること。

次の文章は、目取真俊めとるましゆんの小説「風音」から抜粋したものである。よく読んで、あとの問いに答えなさい。(三〇点)

(これまでのあらすじから)

沖縄県のある村の崖にある風葬場には、風が吹くと、まるで泣いているかのように音を発する「泣き御頭うんかみ」と呼ばれる頭蓋骨がある。この地で亡くなった特攻隊兵の頭蓋骨である。清吉は沖縄戦の最中、亡くなった若い特攻隊兵の死体を、父と共に風葬場に運んだことがある。そしてその兵士の近くに落ちていた万年筆を、どうしても欲しくなって盗んだ。一方、藤野は、子どもの頃に兄のように慕い、特攻隊兵として沖縄で亡くなった加納真一の手掛かりを求めて、年に一度の沖縄への旅を重ねている。戦争から半世紀以上の時を経て、老人となった清吉と藤野とが風葬場であう。

白い日差しが容赦なく降りそそいでいる。清吉は岩の陰に入って、手拭いで汗を拭いた。島で生まれ育ち、暑さには慣れているはずなのに、今年の日差しは特別にきついと思った。

人を痛めつけるほどの陽光は、海と空の青をいちだんと深くして、干瀬びしの波の白さをまばゆいほどにしている。清吉はしばらく海を眺めてから風葬場に近づき、岩の間から見える泣き御頭を見た。樹間から漏れる陽光が、そばに置かれたガラス瓶に反射する。清吉は目を細めて泣き御頭を見つめ、手にした万年筆を見た。泣き御頭が藤野の探している兄のような人であることは、間違いなかった。万年筆を藤野に渡し、遺骨(注1)をヤマトウの地に帰すべきだということも分かっている。だが、清吉は迷い続けていた。何に迷っているのか、そのことをうまく自分で整理できないまま、後ろめたさと苛立ちが募っていた。

あの日、洞窟がまに戻った清吉は、わずかばかりのイモが入った袋を母に渡すと、自分の荷物入れに万年筆を隠した。父の脚の傷が悪化し、洞窟から移動できなかった清吉たち家族は、間もなくして、日本軍の掃蕩戦(注2) そうどうを行っていた米軍に見つかり、收容所に入れられた。米軍の医療班に父は治療を受けたのだが、腐敗した傷口から湧いた毒はすでに全身に回っていた。一週間余り苦しみ抜いたあぐく、父は死んだ。目を見開き、大声をあげてテントの中で暴れる父を見て、村人たちは、風葬場によそ者の遺体を運び入れたからだ、と噂していた。

漂着した特攻隊員を哀れに思い、仮の墓所として風葬場に運んだ。戦争が終わったら遺族を見つけて、遺骨を送ってやりたい。收容所に入った直後、まだ意識がしっかりしているときに、父は同じテントの村人たちにそう話していた。しかし、父の善意は傷の悪化と死によって違った形で受け止めら

れた。声を潜めて話しながら父を見ている村人たちに、清吉は憎悪が込み上げてきてならなかった。命を懸けて父が行ったことが汚されるようで、悔しくてたまらなかった。母や祖母、二人の妹が泣きながら声をかける中、高熱とけいれんに苦しんだあげく、父は錯乱状態のまま死んでいった。

戦争が終わって学校が再開されても、清吉が万年筆を使うことはなかった。布に包まれてそれは、机やタンスの奥にしまわれ続けた。父の死が風葬場の禁忌^aを犯したことにあるなら、同じ報いは清吉にもあるはずだった。遺品を盗んだ分、もつと重い苦しみを味わってもおかしくなかった。村人たちの噂話に強く反発しながらも、それを迷信だと笑うことは、子どもの清吉にはできなかった。万年筆を持っていることは恐れと不安に絶えずさらされることだったが、かといって捨てることも、風葬場に返しに行くこともできなかった。

年を経て清吉の万年筆への想いも薄らいでいった。それでも処分することはしなかった。いつの間にかそれは、父と過ごした最後の日々の記憶につながっていた。布に包んでタンスの奥に隠したままだったが、風音が聞こえるたびに、万年筆を握りしめて風葬場から逃げたときのことか思い出された。自分の行為が父の善意を汚したように思えて、悔やまれてならなかった。その悔いはときに、自分の盗みこそが父に災いをもたらし、自分の代わりには父は死んだように思えてきて、清吉を苦しめた。

清吉は掌に載せた万年筆を見た。この数日、万年筆を持って何度か風葬場に來たのは、この場所で考えれば決断がつくかもしれないと思ったからだ。だが、清吉は迷い続けていた。藤野に万年筆を見せればすべてを話さなければならぬ。子どもの頃犯した過ちを今さら咎める^{とが}ことはないだろう。むしろ、危険を冒してまで遺体を葬ってくれた父に感謝するだろうし、遺品を大切に持っていてくれたと、清吉にも感謝の言葉が与えられるだろう。万年筆が本来持つべき人の手に渡れば、それで清吉の犯した誤ちも解消されるかもしれない。そして泣き御頭も、故郷で安らかに眠ることができさる。

清吉は泣き御頭を見た。泣き御頭の見つめる海の彼方^bには、彼が飛んできた日本があった。村人たちが泣き御頭と呼ぶようになったのも、その音のもの悲しさが、故郷を想って泣いているからだ、と考えられたからだだった。

① 哀^あれ海見^{うみ}ちよてい 泣^なちゆる白骨^{しらほね}や
風ぬ音^{かぜおと}に親^{おや}ぬ 声^{こゑ}が聞^{きこ}ちゆら

村の神人^{かみんちゆ}を勤めていたグジーという老女が作った琉歌^(注3)だった。かわいそうに海を見て泣いている白骨は、海の彼方から吹く風の音に親の声を聞いているのか。そう詠まれた歌には節が付けられ、戦争の翌年には復活したエイサー歌^(注4)の中に組み込まれ、今も歌われていた。だが、清吉はその琉歌が

今まで歌われてきたのは、あのもの悲しい音が心に引き起こす不安とも恐れとも言い難い感情を、村人たちがうまく手懐けるためであることに気づいていた。

この骨の主が判明し、故郷に戻ることになれば、家族にとってもこの骨にとつてもいいことかもしれない。だが、それは村にとつてはどうか。六十年近い時が経ち、いつの間にかこの骨は、村にとつて欠くことのできないものになっているのではないか。普段は泣き御頭を拝むわけでもなければ、風音を忌まわしいもののように言う村人たちが、この数日、風音が聞こえないことに不安や苛立ちを露わにしている。それが清吉には腹立たしくもあれば、同時に嬉しくもあつた。そういう自分の相反する気持ちはどこから来るのか、清吉自身よく分からなかった。

その一方で、十年も沖繩に通つてきたという藤野への同情も日に日に強くなつていた。自分にとつて泣き御頭が、父や戦争の記憶と結びついて忘れられないものになっているように、彼女も深い結びつきによつてこの村に導かれたはずだった。この万年筆を渡せば、彼女が待ち望んでいた再会が果たされる。それを適えることが、自分にとつても最良のことではないのか。しかし、それはこの村から風音が永久に消えることを意味する……。

「泣きませんね」

不意をつかれて、清吉はあわてて万年筆を手の中に隠した。

「やつぱり、私みたいなよそ者が、ここにるのが悪いんでしょうか」

藤野は清吉の横に並んで立つと、泣き御頭に目をやつてから清吉を見た。

「そんなことはない。村の連中が言つてゐることは迷信だ」^(注5)

自分でも思ひがけない言葉だった。意外そうな顔で見つめる藤野に顔をそむけ、清吉は内心の動揺を隠しながら汗ばむ手で万年筆を握りしめた。「歳をとると、かえつて鮮やかによみがえつてくる記憶があるんです」

藤野は風葬場を見上げて、どこか懐かしむような口調で言つた。清吉はうなずいた。

「今さら、どうしようもないことなのに」

深いあきらめの響きを帯びた声音に胸を衝かれて、清吉は藤野を見た。二人は見つめ合った。

「北の方を向いている」

海に目をやり、清吉が言つた。

「え？」

「あの御頭は、ああやつて、戦後ずっと北の方を見て、風音を鳴らしてきた」

清吉の声は波音の中から発せられるようだった。藤野も海を見つめた。

「あんたが来て泣かなくなったとしても、それは恨みや怒りからじゃない」

手の中の万年筆を握り直し、清吉は迷った。自分を見つめている藤野の視線を感じ、向き直って今こそ渡すべきだと思ったが、体を向けることができなかった。

「むしろ、喜んでるからさ」

やっとそれだけ言くと、清吉はその場を去った。うつむき加減に歩いていく後ろ姿に、藤野は丁寧な礼をした。

（目取真俊、『風音』、リトル・モア、二〇〇四年、一五七―一六三ページ、抜粋・一部改変）

注 1 ヤマトウ——沖縄の人々が、沖縄以外の日本の地域を表す呼び方。

2 掃蕩戦そうどうせん——敵を残らず排除する戦闘。

3 琉歌——琉球列島に伝承される歌謡。八八八六の三十音を基本形式とする。

4 エイサー——お盆の最終日に、先祖の霊をあのに送り出すために踊る伝統芸能。

5 迷信——ここでは、ヤマトウンチュ（他府県人）が泣き御頭を調べに来たら泣き御頭が怒ると、村人たちが噂していたことを指している。

問一 傍線部 a～e の漢字の読み方を書きなさい。

a 禁忌 b 彼方 c 手懷ける d 露わ e 衝かれて

問二 次の中から、沖縄県出身の芥川賞作家による受賞作品を2つ選び、記号で答えなさい。

ア 河童 イ 火花 ウ カクテル・パーティー
エ コンビニ人間 オ 水滴 カ 蹴りたい背中

問三 頭蓋骨を「泣き御頭」と名づけ、さらに傍線部①の琉歌を作って今も歌い継いでいる村人の思いとはどのようなものであったか、考えるところを述べなさい。

問四 傍線部②「それが清吉には腹立たしくもあれば、同時に嬉しくもあった」について、なぜ清吉にとって風音が聞こえないことに村人が不安や苛立ちを露わにしていることが「嬉しくもあった」のか、あなたの解釈を述べなさい。

問五 傍線部③「しかし、それはこの村から風音が永久に消えることを意味する……」の「……」にこめられた思いについて説明しなさい。

問六 この小説「風音」には「音」と「声」に関わる表現が多く見られる。「音」と「声」の関係について問題文から具体例をあげて解説し、これらの表現にこめられた意味について考えるところを述べなさい。

二

次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。(三〇点)

素朴实在論は、近代哲学においてはとうの昔に否定された議論である。これを論証したのは、周知のようにカントだった。その議論においては、人間の理性による世界(宇宙)の認識行為自体が精密に反省され、即自的存在(物自体)は人間には認識できないという結論が得られたのである。もちろん、だからと言ってわれわれには客観的な議論など不可能だというわけではなく、フッサールの現象学をへて、そのための努力は続けられてきた。とはいえ、少なくとも人間という生物種による主観的認識という限定性を無視するなら、正確な議論ができないことは今や明らかなのだ。自然科学の仮説にしても、科学者同士の相互討論を通じて A に形成されていくものに過ぎない。相互討論による合意形成がいかなされるかの方法が、客観性の程度を担保するのである。

このように、世界(宇宙)の認知や把握があくまで人間との関係をもとにおこなわれるという「相関主義」は、現代哲学の主流である。とすれば、素朴实在論にもとづくAIの主張に対する反論が哲学のジンエイから現れるのは当然だろう。世界の「意味」を把握できるのは生きている人間であり、コンピュータには把握できない、というドレイファスの議論はハイデガーの実存哲学にもとづいている。相関主義の哲学に依拠する限り、「人知を超える絶対知」などを軽々しく提起できなくなってしまう。コンピュータが人間より計算が速いように、部分的な能力では機械は人間をしのぐことができるが、総合的に人間を凌駕し、難しい社会的判断をゆだねられる普遍的知性ということになると、その探究をささえる哲学的根拠が不可欠となる。

(注1) トランス・ヒューマニストがあこがれる普遍的知性や汎用AIの可能性を肯定したければ、カンタン・メイヤスが近年提唱した「思弁的实在論」(speculative realism)は、少なくとも表面的には、そのためのひとつも洗練された哲学的議論と言えるだろう。それはカント以来の相関主義哲学に痛烈なノンを突きつけた。メイヤスは、数学的論理をもとに世界(宇宙)の事物や出来事について記述する科学的言説の哲学的根拠を論じようとする。つまり、人間を介することなく、世界(宇宙)の即自的な存在にアクセスできるという議論を展開していくのだ。地球誕生などの、人間不在のはるか太古の世界(宇宙)の状況に関する科学的言説(祖先以前の言明)を基礎づけるための哲学といってもよい。素朴实在論に戻るのではなく、相関主義を徹底することでその論理的矛盾をつくのがメイヤスの論証のアプローチなのである。

相関主義の哲学は、反・絶対主義(相対主義)の立場だが、そういう主張自体の絶対性を主張することは難しい。メイヤスはこの点に着目し、緻密な論理を重ねて、絶対的なのは現在の世界(宇宙)のありさまという「偶然的事実」だけだ、という驚くべき結論をみちびく。すなわち、世界(宇宙)の現状を因果的に説明する必然的な理由などなく、すべては偶然に生起するものである。そこでは恒常的に成り立つ自然法則そのものまで否定されてしまう。

思弁的實在論は、「人間による觀察」という大前提なしに世界(宇宙)を語る可能性を開いたとも言えるかもしれない。「AIがAIを創って進歩していく」というシンギュラリティ仮説の議論は、相關主義哲学のもとでは信頼性を失うからだ。「思弁的(speculatif)」とは、何らかの知性(機械的知性をふくむ)が絶対的なものに直接アクセスできるという意味であり、ゆえに思弁的實在論は、トランス・ヒューマニストが追求する普遍的知性の哲学的根拠となりうるのである。素朴實在論と相關主義哲学のあいだのギャップは、今後のAIにおいて一挙にケンザイ化するはずだが、ここでトランス・ヒューマニズムや人間機械論に対する現代哲学者からの攻撃をふせぐのが思弁的實在論とも考えられるのだ。

しかし一方、思弁的實在論は、AI信奉者にとって逆の効果をもたらすとも言える。普遍的知性とは通常、理論モデルのもとで測定データを分析し、法則を導いたり、現象を説明したり、未来予測をおこなったりするものである。だが、思弁的實在論は、恒常的な法則の存在を否定し、次の瞬間に何が起きるか分からないという偶然性や不可知性を強調する。これは因果的に事象の解明をめざす科学者にとっては

B

だろう。むしろ、偶然性や不可知性は原理的な次元の議論であって、当面のところ局所的には自然法則は安定しており、したがって科学的探究という営為そのものがただちに否定されるわけではない。にもかかわらず、世界(宇宙)における理由律の否定が、普遍的知性の存立や進展を危うくすることは確かなのである。(中略)

近代的な世界(宇宙)観では、あらゆる事象は、シヨヨの条件のもとで決定論的あるいは確率論的に生起すると見なされることが多い。事故や地震をはじめ、未来に起こる不確定な事象を予測するときは通常、確率モデルが用いられる。過去の統計データにもとづいてモデルのパラメータが定められ、予測がおこなわれるのだ。そういうモデルでは、時間は予めいわば空間的に計量され、時間軸の上で事象の生起確率が算出される。こういう事象の生起は「運(hazard)」による想定内のものであり、高次元の必然性である確率法則にしたがって「潜勢力(potentialite)」が現実化したと、思弁的實在論では捉えられる。

一方、メイヤスーがより根源的なものと考えるのは、「偶然性(contingence)」のもとで出現する「潜在性(virtualité)」のほうだ。その背後には必然性と関連するいかなる法則もない。つまり思弁的實在論は、時間の経過が、潜在性をもつ事象(予測できない不可知な事象)を引き起こすと主張するのである。この時間はリアルタイムで刻々と過ぎていく時間であり、予め計量された時間ではない。近代において、潜勢力と結びつく時間はお馴染みのものだが、潜在性と結びつく時間を提示したことは特筆に値するだろう。

②ここで、機械と生命体を分かつ境界線が再び出現してくる。機械は、過去のデータにもとづいて現在の処理をおこなう存在だ。第一次・第二次ブームにおけるAIは決定論的事象、第三次ブームのAIは確率論的事象を相手にしたが、それでもただか潜勢力に対処するだけである。つまり、過去のデータの分析によって作動するので、未来に起きる全く新しい想定外の事象をうむ潜在性には対処できない。しかし、生命体は潜勢力だけでなく潜在性にも対処できる。なぜなら、生命体はリアルタイムの現在に生きており、つねに自ら作動ルールを変更していくからだ。生命体が身体をもって

いま刻々と生きていること自体が、オートポイエーシス（自己創出）の連続であり、他方それが生命体の行動の不可知性のベースになっているのである。以上の議論が示唆するように、機械的知性であるAIが収集し分析したデータの数学的ルールにもとづく処理結果を、未来をふくむ世界の客観的な認知にもとづく絶対的判断であるとして単純に信頼してはならない。少なくとも、人間と無関係な普遍的知性がやがて汎用AIを發展させ、人間にとって幸福な未来を築いていく、という保証はまったくないのである。普遍的知性を述べ立てるトランス・ヒューマニストは、それを考えているのが人間だという事実を忘れている。シンギュラリティ仮説とむすびついた樂觀論など、素朴實在論にもとづくセンパクな期待にすぎない。しいて相關主義思想を否定しても、思弁的實在論が示唆するように、悲劇的結果しか得られないだろう。

むろん、使い方次第では、第三次ブームを迎えたAIはわれわれにとって非常に有益となりうる。周囲環境が比較的安定している限り、機械によるデータの定型的高速処理は無駄にはならない。AIによるビッグデータの統計的分析をまったく無視するのは、合理性を欠いた愚行にすぎないのである。

とりわけ、ケリーが説くようなクラウドAIネットワークは今後ますます發達し、グローバルに利用されていくのではないだろうか。カーツワイルのシン

ギュラリティ仮説における人間を超えた神的超知性体の出現予測には首をかしげる人々も、インターネット上で展開される専用AI機能の集まりとしてのクラウドAIネットワークには、それほど違和感をおぼえないはずだ。そこでの汎用性は、単一のアルゴリズムがもつ論理的操作の万能的な汎用性では

なく、むしろ多様なアルゴリズムが連携した集積体としての汎用性だからである。インターネットを活用し、所有よりアクセス（使用可能性）、個人労働より皆の協働を強調するケリーの議論に、明るい未来社会を予感する人々もいるだろう。

とはいえ、そこには大きな危険もまた潜伏している。潜在性もたらす未来の不可知性こそがフレイム問題や記号接地問題などの根本的な遠因だっ

た。これはいかなるAIでもまったく変わらない。機械のすばらしく高い効率性、過去を凝縮し抽象化したモデルから得られるのであり、あえて言えば機械は過去に縛られているのだ。したがって、過去にチクセキされたデータの機械的分析に囚われすぎると、生命体としての本能的柔軟性が阻害され、かえって未来への指針を誤ることもある。地球の気候条件の激変や大地震などをはじめ、われわれを取り巻く周囲環境は次の瞬間にも大きく変動するかもしれない。これは政治経済などの社会状況も同様であり、このとき過去のデータにもとづくAIはまったく役に立たなくなる。

人間（より広くは生命体）、そしてその集団がおこなう情報の身体的意味解釈の広い自由度は、潜在性のもたらす不安に対処して生き抜いていくための手段とも言えるのだ。「超知能／普遍的知性」としてのクラウドAIネットワークを過信し、人間の自由意思にもとづく選択肢を制限するなら、生命力のうむ根源的な創造性が損なわれてしまうのである。

注 1 トランス・ヒューマニスト——新しい科学技術を用いて人間の身体と認知能力を深化させ、人間を前例のない形に進化させようとする考え方を信じる者のこと。

- 2 クラウド——インターネットを介して必要な時にサービスを利用することができるシステムのこと。
- 3 アルゴリズム——問題を解決するための一定の手続きのこと。
- 4 フレーム問題——限られた処理能力しかもたないAIは、現実に起こりうる問題すべてに対処することはできないという問題のこと。
- 5 記号接地問題——コンピュータやAIは、人間のように記号と実世界の意味を結び付けて理解することはできないという問題のこと。

問一 傍線部a～eの言葉を漢字に直しなさい。

- a ジンエイ b ケンザイ c ショヨ d センパク e チクセキ

問二 空欄 A に入る適切な言葉を、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 絶対的 イ 主観的 ウ 客観的 エ 間主観的

問三 空欄 B に入る適切な言葉を、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 漁夫の利 イ 朝三暮四 ウ 青天の霹靂 エ 画竜点睛

問四 筆者が傍線部①『思弁的实在論(speculative realism)』は、少なくとも表面的には、そのためのもつとも洗練された哲学的議論だと言えるだろう」とするのはなぜか、説明しなさい。

問五 傍線部②「機械と生命体を分かつ境界線」とはどのようなものか、説明しなさい。

問六 傍線部③「大きな危険」の内容を具体的に説明したうえで、これからの社会におけるAIの使い方についてあなたの考えを二五〇字程度で述べなさい。

次の古文は、高倉天皇の近臣であつた源通親が著した『高倉院厳島御幸記』の冒頭部分である。よく読んで、あとの問いに答えなさい。(二六点)

はかなくて年も返りて、治承四年(注1)にもなりぬ。春の初めにめづらしきことども、書き尽くしがたし。位下りさせ給ひて、厳島の御幸あるべしなどさ(注2)めき合ひたるも、夢の浮橋を渡る心地するに、如月の二十日あまりにや、春宮に位譲り奉り給ひて、内侍所、神璽(注3)、宝剣渡し奉られし夜こそ、日ごろ思しめし取りしことなれど、心細き御気色見えしか。(注4)

宮人も限りなくあはれ尽きせざりしが、空の気色もかき曇り、残りの雪、庭もまだらにうちそそきて、暮れ方になりしほど、上達部陣に集まりて、あるべきことども、古き跡に任せて行はれしに、宣旨承りて陣に出でて、御位譲りのこと、左大臣仰せしを聞きて、心ある人袖をうるほして、何となく思ひ続けること色に出でたる、その中に、とりわき心ざし深き人にや、かくぞ思ひ続けける。(注5)

かきくらし降る春雨や白雲のおるる名残を空に惜しめる(注6)

(大曾根章介・久保田淳校注、『新日本古典文学大系51 中世日記紀行集』、岩波書店、一九九〇年、四ページ、一部改変)

注 1 治承四年——西暦一一八〇年。

2 御幸——天皇や上皇の外出。

3 春宮——皇太子。ここでは高倉天皇第一皇子、安徳天皇のこと。

4 内侍所、神璽、宝剣——三種の神器。ここでの「内侍所」は神器の一つである八咫鏡やたのかがみを指す。

5 陣——「近衛の陣」にある公卿たちの座席。

6 とりわき心ざし深き人——作者自身のこと。

問一 二重傍線部の助動詞 a「させ」・ b「しか」について、文法的意味・基本形・活用形を答えなさい。(例)推量・べし・終止形

問二 傍線部①「夢の浮橋を渡る心地する」・④「古き跡に任せて行はれし」を、それぞれここでの文脈に即して現代語訳しなさい。

問三 傍線部②「如月」・③「気色」の読み方を、それぞれ平仮名で答えなさい。

問四 二重傍線部 c「f」に」に対する説明として誤っているものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア c「に」は、ナリ活用形容動詞連用形の活用語尾である。

イ d「に」は、時を示す格助詞「に」である。

ウ e「に」は、順接の接続助詞「に」である。

エ f「に」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形である。

問五 傍線部⑤「かきくらし……」の和歌について解説した次の文の空欄(ア)～(エ)に当てはまる語句を書き入れなさい。なお、(エ)については本文(古文)より抜き出すこととする。

この和歌では「春雨」を(ア)に見立てて、人々の尽きせぬ悲しみを表現している。また、「白雲のおるる」の「白雲」は(イ)の比喩となっており、「おるる」は雲が低く見えている意と退位する意とを込めた(ウ)として機能している。歌全体としては、第二句の係助詞「や」と助動詞「(エ)」を係り結びにして疑問文に仕立てており、この事態を受け止めかねている作者の心情が余韻をもって伝わってくる。

問六 この古文に描かれている出来事と密接に関係する古典文学作品の題名を漢字で答えなさい。

四

次の漢文は、八重山地方に伝わる西嘉和良・東嘉和良兄弟の村立て伝説を語ったものである。よく読んで、あとの問いに答えなさい。（なお、文中でゴシック体としているのは地名である。）（二四点）

兄弟嘗居于水嵩^①、後遷于普太良間。已而兄移居宮良地、弟移居白保地。当此之時^②、八重山之人居处未定、散分各处^③、多好争鬪^④、搶奪不弭^⑤。独西嘉和良兄弟各構^⑥草庵^⑦、怡然^⑧自安、以送光陰也。隣境之人皆聞其雅風^⑨、各携妻子^⑩而来、遂聚^⑪為二村^⑫。于是乎西嘉和良兄弟相謂曰^⑬、「今村舍雖已成、山猪時来、牛馬逃去、^⑭尽食五穀^⑮、貽害人民^⑯。不可築垣、以防禽獸哉。」遂自白保、東表川尻起^⑰、迄宮良^⑱、西表高山地^⑲、始築石為垣^⑳。高五尺長二里余。自此之後^㉑、禽獸逃匿^㉒、五穀豐登^㉓、而民以安樂矣^㉔。

注 1 搶奪——奪い取る。

2 弭——ここでは「止」と同義。

3 怡然——喜び楽しむさま。

4 貽——「遺」と同義の漢字。

（嘉手納宗徳編訳、『沖縄文化史料集成6 球陽外巻 遺老説傳』、角川書店、一九七八年、五七ページ、旧漢字を新漢字に改めるなど一部改変）

問一 傍線部①の文(返り点や送り仮名を省略した白文にしている)から置き字となっている漢字を全て書きなさい。なお、同一の置き字は一度書けばよい。

問二 傍線部②「未定」・④「雖已成」の読み方を、平仮名で答えなさい。(歴史的仮名遣いか現代仮名遣いかは問わない。)

問三 傍線部③の意味を簡潔に答えなさい。

問四 傍線部⑤は「垣を築き、以て禽獸を防ぐべからざらんや」と読み下すことを踏まえて、解答欄の白文に返り点を付けなさい。

問五 本文の内容と合致するものを、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 西嘉和良・東嘉和良兄弟は水高や普太良間で同居していたが、禽獸がもたらす被害から人々を守るために、二つの村を興した。
- イ 西嘉和良・東嘉和良兄弟は激しく対立して二つの村に分かれて暮らしたので、八重山地方の人々の間では争いが絶えなかった。
- ウ 西嘉和良・東嘉和良兄弟は離れて暮らすようになったが、楽しい暮らしぶりに憧れた人々が集まってきて二つの村ができた。
- エ 西嘉和良・東嘉和良兄弟の知恵によって大規模な防災用の石垣が築かれたことから、白保・宮良という二つの村が成立した。

国語 解答用紙 (前期日程)

教育学部 学校教育教員養成課程 小学校教育コース 教科教育専攻 (表面のみ)

中学校教育コース 教科教育専攻 国語教育専修 (両面)

受験番号

得点

一						
問一	a きんき	b かなた	c てなず	d あら	e つ (1×5点)	
問二	ウ	オ (1×2点)				
問三	たとえ地元の人間でなくとも、この地で命を失った若者の霊を弔い、敬う気持ちに「御頭」という敬称から感じられる。頭蓋骨が風で鳴る音を「泣き声」ととらえ、若者の無念さや親・大切な人のもとに帰れぬ哀しみを想像している。歌い継ぐことによつて若者の哀しみや無念さを伝承し、死者と共に生きようとしている。(6点)					
問四	「泣き御頭」は、地元の人にとつてよそ者の頭蓋骨である。しかし「泣き御頭」と名づけ、琉歌に歌つて伝承することによつて、いつしか「泣き御頭」は村人にとつて欠くことのできないものになっていた。清吉にとつては父や戦争の記憶と結びついた「泣き御頭」が、村人にとつても大切な存在になっていたことが嬉しかった。(5点)					
問五	万年筆とともに「泣き御頭」が故郷や大切な人の元に帰ることは、死者にとつても、死者をさがし求めてきた人にとつてもこれ以上喜ばしいことはないことは十分理解している。しかしそのことは同時に、六十年近く父や戦争の記憶と結びついた「泣き御頭」の発する風音と共に過ごした日々が、これからはもう失われてしまうことを意味している。自分の人生の記憶と深く結びついた存在を失ってしまう寂しさや複雑な思いを「……」は表している。(6点)					
問六	頭蓋骨が風によつて鳴る「音」を、死者が「故郷を想つて泣いている声」だと村人はとらえている。また村人は、死者(白骨)は、「海の彼方から吹く風の音」に、「遠く離れた故郷の親の声」を聞いているだろうと歌っている。自然の音を単に「音」とせず、死者や見えない存在の発する「声」として聞くことによつて、戦争で亡くなった死者と共に生きる村人の姿が描き出されている。「自然の音」を「死者の声」として聞くところに、戦争の記憶の継承のあり方が示されていると考えられる。(6点)					

問一	a 陣営【1点】	b 顕在【1点】	c 所与【1点】	d 浅薄【1点】	e 蓄積【1点】
問二	A エ【2点】	問三	B ウ【2点】		
問四	思弁的实在論が人間を介することなく世界（宇宙）の事物や出来事について記述する科学的言説の哲学的根拠を論じたものであり、それは普遍的知性の哲学的根拠になりうるものである。その一方で、思弁的实在論が偶然性や不可知性を強調するものであり、世界（宇宙）における理由律が否定されるという点で、実は法則性を導いたりする普遍的知性の存立や進展を危うくするものでもあるから。【6点】				
問五	機械は過去のデータにもとづいて現在の処理を行う存在であるため、確率法則にしたがって「潜勢力」が現実した想定内の事象には対処できるが、未来に起こる全く新しい想定外の事象を生む潜在性には対処できない。一方で、生命体はリアルタイムの現在に生きており、常に自らの作動ルールを変更していくため潜勢力が現実化した事象にだけでなく、潜在性にも対応できる、という差異を明確にするもの。【5点】				
問六	クラウドAIが単一の問題解決ではなく、複数の問題解決が連携したうえで生まれる汎用性を示すものであるという点でより可能性があるものだと言える。しかし、AIがやはり過去に縛られたものである以上、AIの分析を過信しすぎると、人間がもっている柔軟性が発揮される機会が奪われ、未来の指針を誤り、役立たないという大きな危険性がある。このことを考慮すると、AIが人間よりも長けているビックデータの分析をうまく活用しつつも、その分析や予測を絶対視するのではなく、人間が広い自由度をもった解釈を行い、意思決定できるようにしていくことが重要であると考ええる。【10点】				

二二

(小計26点)

問一のみ各①点×6、ほかは各②点

問一	a 尊敬	さす	連用形	b 過去	き	已然形
問二	① 夢のような気持ちにする	④ 古くからのしきたりに従って行われた	② きさらぎ	③ けしき		
問三						
問四	エ					
問五	ア 涙	イ 高倉天皇	ウ 掛詞	エ える		
問六	平家物語					

四

(小計14点)

問一・問三は各②点、問四・問五は各③点

問一	于而	
問二	② いまださだまらず	④ すでになる(なす)といへども
問三	月日を過ぐす	
問四	不 _レ 可 _三 築 _レ 垣、以防 _二 禽獸 _一 哉	
問五	ウ	